

Ruth Finnegan:
*Oral Poetry: Its Nature,
 Significance and Social
 Context*

桜井雅人

「口承詩」(oral poetry)は、文芸学者の間でもそれ自体だけでは十分に通用する用語ではないかもしれない。一般の語学辞書には収録されていないことから推測できるように、非専門家にとっては具体的な実体を想起することさえ困難であろう。簡単に言えば、詩的な表現形態をとる口承文芸(oral literature)ということになるだろうが、従来からの用語で言う「民衆詩」(folk poetry)とか「民謡」(folksong)とその実体において重なり合う部分が大い。しかし、問題意識と考え方が異なるのであって、単なる用語上の相違あるいは外延の範囲の相違として理解されるべきではない。また、同じく“oral poetry”であっても A. Preminger (ed.), *Encyclopedia of Poetry and Poetics* (Princeton U. P., 1965)における定義はいわゆる「口承(フォーミュラ)理論」に基づいたもので、本書の概念よりはるかに狭い。

第1章で示された著者の考えによると、「口承詩」における「口承性」には(1)制作(composition), (2)伝達様式, (3)演唱(performance)という側面があり、書記文献伝承と明瞭な境界があるのではなく、これら3種の側面から程度の問題としてとらえることになる。このことは、著者のアフリカ口承文芸研究(*Oral Literature in Africa*, 1970)においてすでに確立していた考え方であり、

「無文字社会」でもコミュニケーション・メディアの混在を考慮すると文字文化との接触があることが認められ、多くの場合は共存し相互に影響を与えていることがわかるし、「近代化」社会においてはこの2つが重なり合って混合している、と言う。それゆえ、アフリカも英米も、ホメロスも現代も、理念的には全民族・全時代が考察の対象となっており、前後して出版されたアンソロジー(*The Penguin Book of Oral Poetry*, 1978)もそのように編集されている。また、詩とは何かという問題については、韻またはリズムがあること、日常言語および散文とは区別される様態があること(口承詩においては、演唱なども含む諸要因)をあげて、これらはいずれも相対的なものであって社会的場面から切り離して抽象的に規定できず、詩という概念も文化によって異なる、と言う。さらに、「テキスト」は口承文芸にとっては一要素にすぎないとして、演唱という側面を重視する。もちろん、この演唱ということは、リズム・旋律・和声などの音楽のテキストの側面を指すのではなく、口承詩がコミュニケーションであって社会的脈絡に依存することを意味している。

第2章では、従来のいくつかの主たる研究方法(ロマン主義的進化論的理論、歴史的地理的方法、文芸社会学、社会とコミュニケーションの社会学的概念)を紹介し問題点をあげて批判する。特に、著者の立場が文芸社会学であり社会人類学的であるから、民俗学に対してはきびしいのは当然であろう(ただし、最近のアメリカ民俗学の貢献は重要である、と言う)。学説の範疇化自体にはやや強引なところもあるが、その批判は大筋において妥当であると評者は考える。たとえば、セシル・シャープの進化論的民謡観、フィンランド学派が内容とテキストを重視しすぎることなどは評者も疑問を抱いていた。

そのあとには、制作・スタイルと演唱・伝達に関するより文芸学的な3章と、詩人・聴衆・詩と社会に関するより社会学的な3章が続く。唯一の制作理論とも言える「口承フォーミュラ理論」については、記憶や演唱などの観点や口承性の概念から、また世界各地の事例を検討することによって、より広範囲にかつ相対的に位置づける。口承詩に特徴的なスタイルに関しては、演唱の重要性を強調することによって規定する。伝達については、「分配」(distribution)および「公表」(publication)を共に考慮しながら、記憶や再創造の問題を検討して「ロマン主義的」伝達観を避け、口頭伝達そのものが現代においても最も重要なコミュニケーション手段であり、それが筆承文芸においても前提となっていることなどを説く。詩人(一般的なことばなら「歌手」・「演唱者」)については、具体例を検討しながら、口承詩が社会によって与えられる機会と制約および個人的な洞察力と獨創性との両方によって作られることを述べ、個人が創造し集団が再創造するという考え方をしない。それゆえ、演唱者は社会的地位や機能を有する詩人となる。聴衆はたとえ無言であっても演唱者およびテキストに大きな影響を与える。人気のない演唱・テキストがすたれたり変化したりすること、特定の状況で演唱されること、その目的は聴衆にとって単一ではないこと、を説明する。最後に、文芸が社会を反映するという見方を避けて、文芸は人間の創造的想像力の手段、自分のまわりに世界を作りあげる社会的現象とする。このことは、人間を社会構造の所産ではなくて能動的想像的・思想的動物とみなす著者の哲学から由来している。

本書は専門家を対象としたものではなく概論書であり、包括的でも完全を目差したものでなく序説であり、特定な理論的モデルではなく論点を提示するものである、と著者は

言うが、整理の仕方は独創的であって一つの方向を打ち出している。文芸学と社会学のどちらからも周遍的と考えられてきた題材に、様々な学問の成果を利用しながら光をあてることによって生じたものである。それでもやはり文芸学でもなければ社会学でもない、という批評は可能であろう。言及されているのは民俗学や人類学の成果が多い。しかし、それだからこそ、新しい文芸社会学として価値がある。

従来の学問分野からみると民族音楽学がかなり近い範囲のことを扱ってきているが、その学問はあまりにも文芸に関心を示さなかった。ちょうど反対のことを、本書の批判とすることもできよう。著者は、音楽的分析が欠如していること、それを扱う能力がないことを述べてはいるが、若干ではあっても音楽学者の文献も利用していることであるし楽譜を示さなくても音楽的側面との関連を述べることは可能であろう。また、口承詩の社会的側面を述べることは必然的に音楽社会学を口承詩にまで広げることも部分的に含むことになるから、たった一つの楽譜も単なる見本として与えられているだけではさびしい。この点については、一部の文芸学者や民俗学者のほうはるかに進んでいる。

参考文献や資料がほとんど英語で書かれたものであることは読者に親近感を与えるのだが、それとともに資料が限定されているのは当然である。もちろん世界各地の口承詩をすべて扱うことなど誰にもできないまたその必要もないかもしれないが、片寄りがあると言うことができる。たとえば、中心になっているのはアフリカと英米および古典(ホメロスなど)であって、それにチャドウィック(Chadwick)夫妻、パウラ(C. M. Bowra)、ロード(A. B. Lord)などを加えてみても、東洋・ヨーロッパ・中南米は手薄である。ドイツやハンガリーの「民謡」は例示もされて

いない。日本に言及するにしても、官廷歌人・社歌・アイヌ歌謡だけということになると、ずいぶんと偏食しているとの印象を受ける。著者が比較研究を方法として相対主義を進めていくなれば、この間隙は埋めなくてはならないか、あるいは埋めなくても主張に影響がないことを示さなくてはならないだろう。もちろん、これは今後の課題であって、著者の意図が問題の提起と叩き作りであるのなら、その意図は成功している。また、英米における研究の片寄りの反映だとすると、著者のみが責められることは不当であろう。これと関連して、歴史的観点が希薄であることは、一部の民俗学者ほどではないにせよ、目立つ。口承文芸のジャンルと社会との関係はもっと歴史的に考えてみる必要があろう。「英雄時代」・「パラッド社会」・「口承文化」の設定に疑問があるにせよ、ジャンルの発展と社会との関係に歴史性があることはそう簡単に否定はできそうもない。その理解のためには、枠組を口承文芸全体にまで拡大しなくてはならないし、すでにかかなりの資料や研究のあるヨーロッパ諸国・ロシア・日本などを考察に加える必要がある。

以上のような無い物ねだりはきりが無いし、守備範囲を限定したことによって生じる価値のほうを認めるべきかもしれない。いずれにせよ口承詩研究としては最もすぐれた唯一の本格的概論書であり、これからの研究の出発点とすることができる。また、著者もそれを望んでいる。我国の民謡研究についても、単にロマン主義の残存とか地域性と労働・作業との結びつきくらいしか考慮していないという批判をする前に、研究上の問題点とその方法を考えるべきであり、そのためには本書はよい参考となるであろう。さもなければ、日本の民俗学的な民謡研究は、いつまでたっても、収集と調査にあけくれることになり民俗学の内においてもまた民俗学全体も正当な位

置を占めることはできないだろう。

Ruth Finnegan, *Oral Poetry: Its Nature, Significance and Social Context*. Cambridge: Cambridge University Press, 1977. ix+299 pp.

永川玲二『ことばの政治学』

出口裕弘

おおかたが対話で構成されていて、読みもの風の仕立てになっているけれども、これは、ことばについて深刻に考えさせるだけの力を持った本である。著者の永川氏は英文学、英語学の畑の人だが、たしか、ヨーロッパに出かけて、そのままイベリア半島のあたりに居ついてしまい、一時消息も定かでなくなったことがあると記憶している。平安な欧州留学の軌道からわざと外れて、かなりスリルのある年月をヨーロッパ各地で送った人物と見受けられる。ヨーロッパ各国のことばを、観光客や研究旅行者としてでなく、なまの生活者として必死に使った経験があるのにちがいない。人間の言語が否応なしに巻きこまれていく「政治学」——もっと露骨に言えば「言語戦争」の実態を、生身で十分に味わってきたところに、この著者の何よりの強みがあるといっていいただろう。

地球に群れるこの人間という生きものの使う言語は、パベルの塔の神話ではないが、神罰が下ったせいでこうも千差万別なものにな